

令和元年6月21日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01758

研究課題名(和文) 学校教育におけるレジリエンス育成の縦断的研究

研究課題名(英文) A Longitudinal Study of Resilience Development in School Education

研究代表者

池田 誠喜 (IKEDA, Seiki)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：90707192

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究結果として、研究者同士並びに研究分担者と調査対象校に協力を依頼する学校教職員がレジリエンスを理解するための概念の整理を行い心理的機能を高めるプロセスモデルを示した。さらに、近似する心理学的概念との異同を検討しレジリエンスに近似する心理学的概念の応用が可能なが示唆された。また、ストレス状況が高まる中でもレジリエンスを高める心理的機能の維持が生活満足感を高く維持するというレジリエンスの機序が明らかになった。さらに、学校教育においてスクール・エンゲイジメントの状況を作り出すことによりレジリエンス状況を生み出すことに寄与することが、3年間の縦断的調査により明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

レジリエンスの育成は、誰もが傷つきダメージを受けるという現実を反映し、そこから立ち直る力を育成することであり、ストレスに対するハーディネスやブルネラビリティ概念より学校生活の実際に近い現象を示していることから、学校生活で苦戦し家庭で苦慮している学齢期の子どもたちを前向きに活力を持って生活する力を持たせることが期待できるものである。また、学校教育現場で学齢期の子どもたちの学校適応のみならず、望ましく発達に寄与する新たな支援方法を提供するものである。さらに、レジリエンスの育成は、学校教育だけでなく様々なヒューマンサービス分野において活用可能な支援方法を提供することが可能である。

研究成果の概要(英文)：As a result of this research, we have shown a process model that enhances the psychological function by organizing the concepts for understanding the resiliency among the researchers as well as the school staff who request the cooperation between the research co-workers and the target school. Furthermore, it was suggested that the application of the psychological concept which approximates resiliency is possible, considering the difference with the psychological concept which approximates. In addition, the mechanism of resilience has become clear that maintaining the psychological function that enhances resiliency maintains a high sense of life satisfaction even under stressed conditions. In addition, it has become clear from a three-year longitudinal survey that it contributes to creating a resilience situation by creating a school engagement situation in school education.

研究分野：子ども学

キーワード：レジリエンス スクール・エンゲイジメント 縦断的研究

様式 C-19, F-19-1, Z-19, CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究で用いるレジリエンス概念は、欧米の精神発達病理学や精神医学などで研究が進められている“resilience”を日本語で表したものである。2000年以降、日本でもヒューマンサービスの様々な分野で研究や実践の広がりを見せてきた（例えば、石井京子ら「患者のレジリエンスを引き出す看護者の支援とその支援に関与する要因分析」2007年）。このような背景の中、学校教育にもレジリエンスの考えを取り入れ、学齢期の子どもたちの望ましい発達に寄与させようという取組みも徐々に行われている。

レジリエンスは、一般的には劣悪と思われる状況下に育っていても、リスクにうまく対処し、悪影響を克服して成長している子どもたちのもつ特性やプロセス（Masten, Best & Garmezy, 1990）と定義されており、困難な出来事を克服し、その経験を自己の成長の糧として受け入れる状態に導く現象について記述したものである。困難な状況に陥ってダメージを受けても立ち上がる姿は、様々なストレスや厳しい環境で生活する学齢期の子どもたちに望ましい発達を獲得するためのモデルになると考えている。

これまで、発達支援を行う援助者や教育関係者には非常に魅力的な概念として紹介されてきたレジリエンスは、実際のところその定義が定まっているとは言えずに抽象的な捉え方にとどまっており、深谷（2009）が『こどもの「こころの力」を育てる-レジリエンス』において、「この領域の研究や実践は、まだまだ始まったばかりです。これから実践や臨床の場で追求されるべきテーマです。」と述べていることから、レジリエンスの育成を学校教育の中で組織的体系的に取り組むには、学校教育でレジリエンスを育成するための概念や機序、育成方法についての共通理解を図ることができるよう整理をしなければならない状況にある。

2. 研究の目的

上述したレジリエンスの背景を鑑み、本研究の目的は、第一に、学齢期の子どもたちのうち、リスクにうまく対処し悪影響を克服して成長している子どもたちについて調査を行い、ダメージから回復する力（以下、本研究ではレジリエンスと記述）の機序を明らかにすることである。第二として、子どもたちの望ましい発達に寄与するレジリエンスを育成する方法を開発することである。その達成のために、次の3つの具体的目標を設定した。(1)レジリエンスに関する概念整理を行い、共通理解を図る素地をつくる。(2)レジリエンスの特徴及び機序について明らかにする。(3)レジリエンスを育成する取り組みを構想する。

3. 研究の方法

(1)レジリエンス概念の整理

本研究では、子どもたちのレジリエンスを学校教育で育成するための調査を実施するにあたり、現状ではしっかり定義されていないレジリエンスの整理を行い、研究者同士並びに研究分担者と調査対象校に協力を依頼する学校教職員へ共通の枠組みの提供が必要であった。そのためにレジリエンスの概念整理を行うため、諸外国の学校教育におけるレジリエンス適用実践例の収集及び分析データを基に、学校教育におけるレジリエンス育成の方略を検討し、日本の学校システムや風土と照らし合わせ異同を明らかにした。また、その結果に基づいて、調査対象の教員に対してプレゼンテーション及び内容の検討会を開催した。

(2)レジリエントの特徴及び機序の解明

レジリエンスの概念整理を基に、レジリエンスの状況を生み出す心理的機能であるレジリエンシー尺度を作成し、中学生にレジリエンシーの状況を調査する。また、レジリエンスの状態を判断するものとして生活満足感尺度（栗原ら、2010）を用いて、レジリエンシーと生活満足感との関連について3年間の縦断的調査を質問紙調査により実施した。さらに、担当する教師を中心とした学校教職員関係者に協力者を依頼し聴き取り調査を実施した。また、調査対象は平成27年度4月に入学する中学1年生を対象としたコーホート集団で、3年間の縦断的調査を実施した。

(3)レジリエンスを育成する取り組みの構想

研究代表者はこれまでにレジリエンス概念を適用した支援により、学校不適応の生徒を徐々に回復する試みを行い、一定の成果を納めるとともに学校におけるレジリエンス概念を適用する方略についていくつかの示唆を示してきた。これまでの研究代表者によるレジリエンスを育成するための知見、本調査研究の3年間の縦断的調査研究から得られたレジリエントの特徴及びレジリエンスの機序を基に、スクール・エンゲイジメントとレジリエンシーの関連モデルを検証し、学校教育におけるレジリエンスを育成する取り組みを構想した。

4. 研究成果

(1)レジリエンス概念の整理

レジリエンス概念の整理の成果として、第一に、研究者同士並びに研究分担者と調査対象校に協力を依頼する学校教職員がレジリエンスを理解するための概念の整理を行った。本研究では、Rutter (1993)の「レジリエンスは定位的な要因を特定することよりもむしろプロセスという言葉で理解すべきである。」というレジリエンスの理解に基づき、レジリエンスを能力と捉えるのではなく、プロセス（道のりまたは過程）として捉えることとした。そのため、Kumpfer (1999)の「Resilience Framework」を一部修正したモデル（図1）をレジリエンスの育成モデルとして捉えた。「Resilience Framework」は、主に6つの領域

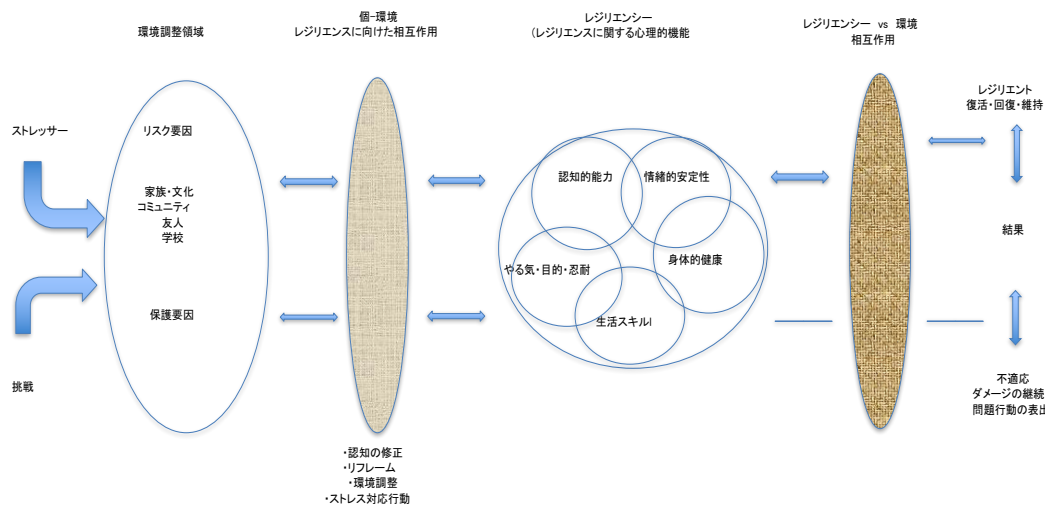


図1 Kumpfer(1999)の「Resilience Framework」を一部修正したモデル

で構成されており、そのうち4つについては影響を受け合う領域、2つを環境からの影響因と個人の心理的機能の働きが相互作用する領域としている。

さらに、本モデルについて、設定された領域を追いながら説明を加えると、ネガティブなストレスラーとポジティブなかかわりをする可能性のあるストレスラー（ここではチャレンジと表記）の2つが認知される領域を最初に設定してある。ここでの認知の結果が次の領域に反映されるよう組み立てられている。次の領域では個人の環境的要因状況と前領域で認知されたストレスラーとの調整が図られる。そして、その次の領域において、持っているリソースと環境からの働きかけを調整するような作用が行われる。この相互作用の結果により、レジリエンシーと呼ぶレジリエンスの実現に働きかける心理的機能領域に影響をもたらす。前領域の結果を受けて回復に向かうレジリエンシーの働きが高まる領域を経て、次の領域で実際のレジリエンスへのチャレンジが行われるとしている。この領域がうまく作用すると短期間レジリエンスの状態になることが想定されている。さらに、随時結果が評価されるとともに、場合によっては前領域に戻るという往還が想定されている。最後に現在の適応や不適応を示す結果に帰結するモデルである。Kumpfer(1999)のこの枠組みは、先行研究の知見と照らし合わせても合理性が高く、レジリエンスが生み出される経過をわかりやすく説明していると考えられる。

第二として、レジリエンスに近似する心理的概念の異同を整理して表1に示した。これまで述べたレジリエンスに関連する心理学的な概念について、回復する過程を辿り始めるための仕組みや方法について理解を深めることで学校教育の場で活用できる心理学的概念の特徴と学校教育への適用可能性という視点でまとめた。

これらの特徴として、①ネガティブな原因やリスクを取り除こうというモデルではなく、良い面をのぼす、知られていない面を開発するというストレングスアプローチの視点があること、②学校教育の期間(学齢期)に成功体験や活動に熱中するなどの経験を通して育むことを前提としていること、③その場の効果だけではなく、長期的な効果を念頭に置いていること、④ポジティブな感情を起こさせるためのコミュニケーションがベースにあることが認められた。ダメージから回復する姿をイメージさせるレジリエンスの考えを学校での教育実践や学齢期の子供たちの支援に活用させるにあたり、レジリ

表1 心理学的概念とレジリエンスの関連と学校教育適用への展望

	レジリエンスとの関連	学校教育への活用
発達精神病理学	・レジリエンスはプロセスを辿りながら変化する概念である	・発達経過における成功体験が望ましい発達の帰結を導くもの
ポジティブ心理学	・前向きな姿勢を評価する哲学	・ポジティブな志向を生み出す
ポジティブ感情	・ポジティブ感情の経験による 思考-行動レポートリーの拡張	・学校でポジティブ感情を生み出さしかけ 学級風土 コミュニケーション
フロー体験	・個人資源の継続的形 人間のらせん的变化と成長 ・没入感覚をとまなう楽しい経験 継続する意欲の創出 継続した取り組みによる能力の向上 首尾一貫性感覚の向上	・日常におけるポジティブ感情のらせんの効果 ・学校教育で経験することが可能 部活動 委員会活動 特別活動 など学習以外の活動でもフロー体験が可能
首尾一貫感覚	・把握可能感 ・処理可能感 ・意味感 回復のための心理的機能の役割	・学校教育活動において成功体験を与えるなど首尾一貫感覚を高める仕掛けが可能である。心理的機能を高める可能性がある
楽観主義	・ポジティブな言葉に反応 ・楽観的説明スタイルにおける効果	・学校教育活動において成功体験を与える ・モデリングが可能 ・教師の仕掛けが可能
自己効力感	・成功体験からの高まり ・モデリング ・言語的説得 ・情意面での安定	・学校教育活動において成功体験を与える ・モデリングが可能 ・教師の仕掛けが可能
解決志向アプローチ	・ポジティブな認知形成 ・原因にこだわらない ・安全性	・前向きなものの見方の形成 ・原因を特定しないことよき ・教師の取り組みやすさ

エンスそのものを扱う必要はなく、関連する様々な心理学的概念を結びつけて捉えることで、学校で持ち合わせているリソースの活用という視点で、これまでの知見として十分実践できることが期待できる。レジリエンスを実現している子供たちをレジリエントと称し、その特徴及び機序を解明するための調査の成果を示す。本調査では、中学生期は不登校やいじめの認知件数の割合が他の学校種よりも多く、学齢期におけるストレス状況が不適応等顕在化する時期であり、ダメージからの回復の機序の解明が喫緊の課題とされている状況を鑑み調査対象を中学生とした。ダメージから回復することは一朝一夕に実現するのではなく必ず回復するための過程を辿っていることを再認識し、中学校教育で活用するためのレジリエンスを「困難な状況やダメージを受けた状態においても、環境との相互作用の中で、回復もしくは健康を維持するための心理的機能の働きを活性化して再び環境との相互作用において立ち直りを実現する道のり」と定義し、回復する過程（レジリエンス）を辿ることにかかわる個人の心理的機能を先行研究（Masten, 1994）にならい、「レジリエンシー」と定義してレジリエンスと区別して用いることとした。

(2)レジリエントの特徴及び機序の解明

レジリエンスを実現している子供たちをレジリエントと称し、その特徴及び機序を解明するための調査の成果を示す。本調査では、中学生期は不登校やいじめの認知件数の割合が他の学校種よりも多く、学齢期におけるストレス状況が不適応等顕在化する時期であり、ダメージからの回復の機序の解明が喫緊の課題とされている状況を鑑み調査対象を中学生とした。ダメージから回復することは一朝一夕に実現するのではなく必ず回復するための過程を辿っていることを再認識し、中学校教育で活用するためのレジリエンスを「困難な状況やダメージを受けた状態においても、環境との相互作用の中で、回復もしくは健康を維持するための心理的機能の働きを活性化して再び環境との相互作用において立ち直りを実現する道のり」と定義し、回復する過程（レジリエンス）を辿ることにかかわる個人の心理的機能を先行研究（Masten, 1994）にならい、「レジリエンシー」と定義してレジリエンスと区別して用いることとした。本調査研究では、このレジリエンシーをレジリエンスの状態を実現するための心理的機能を活性化させるものとして捉えた。第1因子は「いろいろなことにチャレンジするのが好きだ」などの項目内容であり、小塩（2002）、石毛（2006）の先行研究に照らし合わせ「活動意欲性」と命名した。第2因子は「寂しいときや悲しいときは自分の気持ちを人に聞いてもらいたいと思う」「つらいときや悩んでいるときは自分の気持ちを人に聞いてもらいたいと思う」などの項目内容であり、同様に、この因子を「対人関係性」と命名した。第3因子は「何事も良い方に考える」「困ったことがあっても良い方向にもって行く」などの項目内容であり「楽観性」と命名した。第4因子は「自分の感情をコントロールできるほうだ」「動揺しても、自分をおちつかせることができる」などの項目内容であり「感情コントロール」と命名した。

次に、レジリエンシー尺度と生活満足感尺度を用いた3年間の縦断的調査で収集したデータにより、レジリエンシーと生活満足感との関連を成長曲線モデルにより分析検討した（図2）。学年が進むにつれ生活満足感が低下している状況になるなか、3年生時にレジリエンシーが活性化している生徒は、学年が進み年齢が上がるにつれて高まると考えられるストレス状況の中でもレジリエンスを生み出す心理的機能を3年間通して維持しており、3年生に置いても生活満足感を高く保っていることが示唆された。

(3)レジリエンスを実現する取り組みの構想

このレジリエンシーとした心理的機能を活性化させるものとして、本研究では心理的没入や熱中している状態を表すエンゲイジメントを取り上げた。鹿毛（2013）が、「エンゲイジメントとは、人と環境との間で現在進行形で生起するダイナミックに変化する相互作用を心理的現象の質として記述する概念であり、まさに知情意が一体化した『今ここ』での体験を意味している」と述べていることから、エンゲイジメントがレジリエンシーの働きを高めることが十分に期待できると判断した。特に、児童生徒にかかわるエンゲイジメントはFredricks, Blumenfeld, & Paris (2004) により、“school engagement” と称されている。スクール・エンゲイジメントは、学力の低い児童生徒の改善が期待できる一方で、高い学力の児童生徒の不満や退学のリスクに対しての抑止効果になるものとして報告されている（Fredricks, Blumenfeld, & Paris, 2004）。

そこで、レジリエンスを実現する取り組みの構想として、生徒のスクール・エンゲイジメントを高める

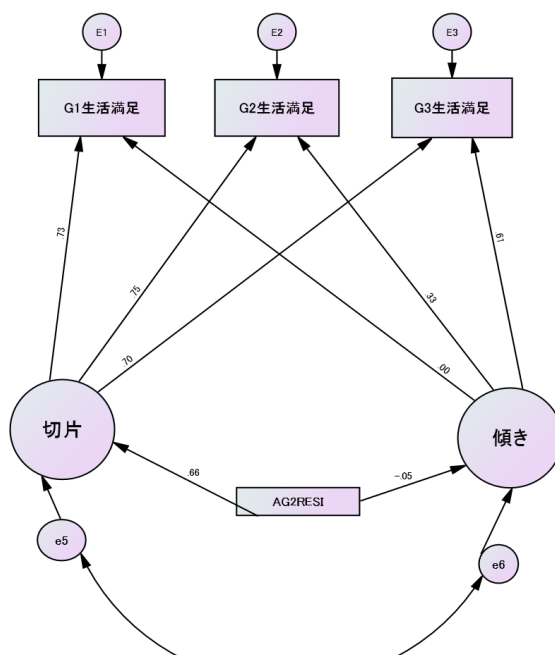


図2 レジリエンシーと生活満足感成長モデル

ことがレジリエンスの心理的機能を高めると考え、スクール・エンゲイジメントとレジリエンシーの関連を検討した。結果を図3の関連パスモデルに示す。

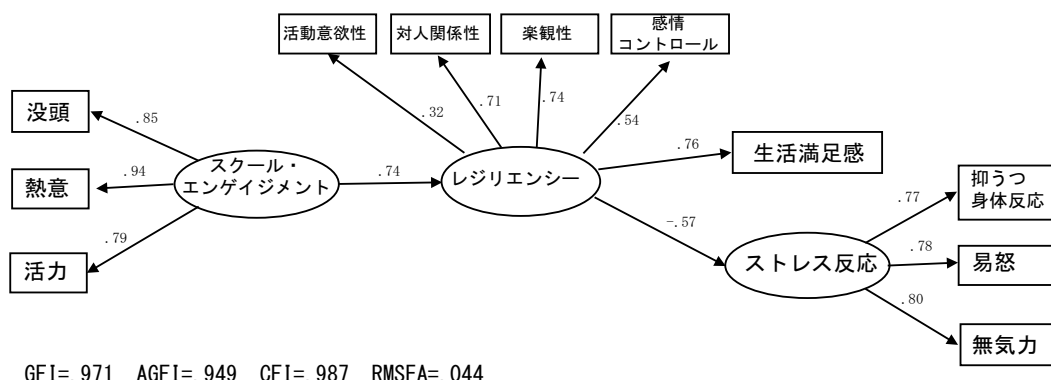


図3 関連パスモデル

この結果より、スクール・エンゲイジメントを高めることにより、心理的機能としてのレジリエンシーが高まり、レジリエンスの育成に寄与することが示唆された。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3件)

- ①池田誠喜・芝山明義・後藤正彦, 「生物, 心理, 社会モデルによるレジリエンスの理解と学校教育への適用」, 『鳴門教育大学研究紀要』, 第34巻, 2019, pp. 109-119
- ②池田誠喜・芝山明義・後藤正彦, 「レジリエンスと関連する心理学的概念の特徴と学校教育への適用」, 『鳴門教育大学研究紀要』, 第33巻, 2018, pp. 184-198
- ③池田誠喜・後藤正彦, 「中学生の生活満足感とストレス反応に影響を与えるエンゲイジメントとレジリエンシーの関連」, 『生徒指導学研究』, 査読有, 第16号, 2017, pp. 52-61

[学会発表] (計 件)

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年：
 国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：金児正史

ローマ字氏名：KANeko Masahumi

所属研究機関名：鳴門教育大学

部局名：大学院学校教育研究科

職名：教授

研究者番号（8桁）：00706963

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。